

Rep
ort

身近な自然の観察・記録活動 石神井川緑道版

2021.8.12

一人ひとりの自主活動 だれでも参加できます

活動：月2回(第二木曜日・第四金曜日)10:00より(雨天中止)
コース：帝京大学付属病院北詰・御成橋たもと → 金沢橋
問合せ・連絡先：090-8646-9757 木村松夫 com-matchan@hotmail

8、9月の石神井川観察は、8/27(金)、9/9(木)、9/24(金)
10:00 帝京大学病院北側の御成橋たもと出発

「草むら」という一つの世界



帝京大学付属病院前の石神井川沿い緑道。約3週間ぶりの観察・記録活動の8/12は草刈りが行われて植え込みの下はすっかり土がむき出し状態でした。でも、一部刈り残された草むらもありました。この草むらを、周囲の景色から切り離して眺めていると、奥深いみどりの世界が見えてきます。「雑草」と言われる植物をどう見るのか見ないかは「文化の問題」なのです。

「主」と「雑」の逆転 共存できる工夫はないものなのか



緑道に植え込まれたサツキツツジを「主」の植物だとすると、その下の野草たちは「雑」として扱われ、草刈りのたびに排除されてしまうのですが、「主」であるサツキツツジに絡みつき花を咲かせる「雑草」のヘクソカズラ。ここでは「雑」が上手に「主」を活用して日が射すところまで伸びてきた主従逆転現象が起こっていました。どんなに排除しようとしても生き返ってく

るのが野草。それを排除の対象にしないで、共存していけるようなみどりの管理は可能なはず。実際、右の写真の**アベリア**の奥の草原はアカツメクサの群落が残されていました。他の場所ではウマノアシガタを残した草刈りが行われていました。考えられてそうなったのかどうかは分かりませんが、近頃「野草を大事にしよう！」という文化の芽生えが少しだけ感じられるようになってきたのも確かです。



ほとんど誰にも気づかれずに咲いている花や実



写真が小さすぎて分からないと思いますが、順に**マユミ**（実）、**タニウツギ**（季節違い咲き）、**トキワハゼ**、**ニシキソウ**、**クサイ**（丸みがある葉は**オオバコ**）。

どれ一つをとっても必死に命を燃やしている生き物。その生き物の一種である「ヒト」の一方向的な好みで、これらの命を絶やしてしまえば、そのうち「ヒト」も絶滅してしまいます。